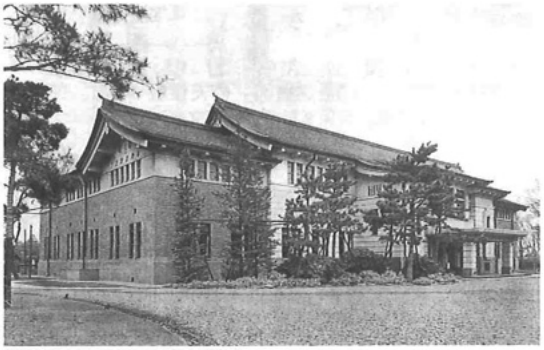
時代は変わる——国史絵画舘をめぐって

森　仁史

実はまだ松岡壽である。松岡は生涯に三度の壁画しかもそれも歴史画制作に関わった。細かく調べたわけではないが、これは日本の画家としては多いのではないだろうか。そして、七十五歳にして最後に関わったのが東京府から依頼された国史絵画舘〔図1〕の洋画部門責任者の仕事であった。日本画部門は時の東京美術学校日本画科主任教授結城素明であった。ここに掲げられた作品は現在は伊勢神宮境内の神宮徴古舘農業舘に収蔵されている。これについては蔵屋美香の論文（『視覚の昭和展図録』松戸市教育委員会、一九九八年）があり、小生も本誌第九号で少し触れたが、いま少しその後に見つけた資料などを参照しつつ記しておきたい。

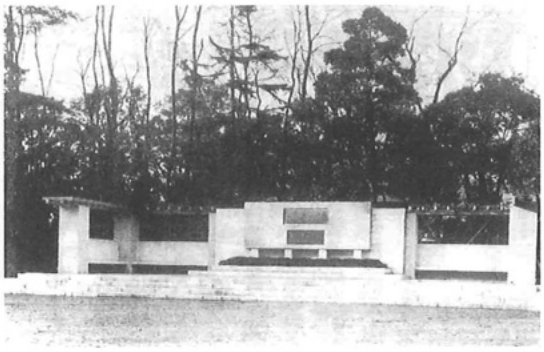
国史絵画舘誕生のあらましについては、名誉舘長となった東京府知事香坂昌康による『養正舘の期する処』に従えば、昭和八年十二月二十三日、待望の皇太子が誕生するや、東京府は奉祝記念事業として、「第一に児童を対象とする事業であること、而して第二に、永久に亘つて有意義なる事業たること」を目標に、前者のために「国史絵画舘及び講堂」を、後者のために「寄宿寮、静修室及図書室」を設置することとした。これは「小国民に対する精神教育の殿堂」であり、同時に小学校、青年学校、中等学校の「教員等の修養道場」を付設し、教員の「心境信念を養う」ことを企図した施設で、「東京府養正舘」と名づけられた。

この敷地は高松宮から旧有栖川宮邸用地が提供された。これはもと盛岡藩南部家下屋敷の敷地を有栖川宮邸としていた場所で、池を中心とする庭園部分がすでに高松宮から昭和九年（一九三四）一月に東京市に賜与され、同年十一月から有栖川宮記念公園として開放されていた。このとき東京市は先例のない恩顧に応えるべく公園設計に力を込め、竣工後には報告書〔図2〕も作成した。公園波及下屋敷の園池の周囲の整備と台地部分に新たに設けられた長円形の広場を中心とし、後者に面して記念碑銘壇〔図3〕を建設した。記念碑は幾重にも連なる矩形がインターナショナル建築を凝縮



1　国史絵画舘

2　有栖川宮記念公園報告書
（東京市役所、昭和９年）



3　記念碑銘壇

したかのようなシャープな印象を与え、これに対面する南部正門も同様な形式をとって互いに呼応し、いかにも一九三〇年代のモダニズム風なデザインになっていた。碑の背面に東京市政博物館の建設が計画されたが、建物や展示が年度内に可能な規模に収められて木造平屋建て延床四十坪の東京郷土資料仮陳列舘〔図4〕が開設の運びとなった。これは東京市にとって初めての公設博物館であった。

そしてさらに、この公園の東側の下屋敷が建っていた部分が東京府に与えられ、高松宮自身によって敷地は清風園と名づけられた。東京府は先の目的に従って、国史絵画舘・講堂・静坐室の三棟を計画し、これらの竣工後、昭和十二年（一九三七）十二月一日清風園並に養正舘開舘式が挙行され、国史絵画舘の公開が始まった。こちらの建物は設置趣旨に則り国風のデザインであり、隣接する二つの空間の雰囲気はひどく対照的であったはずだ。それが日本の一九三〇年代の実像というものだろう。

4　東京郷土資料仮陳列舘

5　昭和塾堂

この時期に、こうした青少年向けの精神修養施設は東京に限らず全国各地に建設されていた。例えば、昭和三年（一九二八）には愛知県昭和塾堂（名古屋市）〔図5〕、十一年に大阪青年塾堂（講演場、講堂）、十三年に青少年鍛錬生駒山道場（大阪府）が建てられている。最初に挙げた昭和塾堂は今も当時と同じ覚王山に大学施設として現存しているが、建物はアジア諸国の建築様式を綜合したことを誇り、施設としては中央の講堂に宿泊施設が連結されるプランで、児童婦人への体育や精神修養活動に力点を置いていた。確かに鴟尾を頂く瓦屋根や高欄をめぐらした塔屋は仏教的アジア的である。

絵画による青少年教育を実現したのは東京府だけで、この国史絵画舘では絵画を展示して参観者に歴史を伝えるだけではなく、その複製物による普及にも努めている。開舘後の昭和十四年に「国史絵画ヲ各種印刷物トシテ発行スル」目的を以って養正舘内に国史絵画会なる組織が設立され、その「絵葉書、図録、掛図其他」の出版販売を出版社に委託し、印税の半分を養正舘に寄付し半額を揮毫者とその遺族に分配することにした。すべての壁画がそろったのは昭和十七年四月であったらしく、この後に同会は少なくとも左記の最初の画集の刊行主体となった。実際に昭和十七年頃には芸艸堂がこれらの絵葉書、額面用図版、壁画解説の販売を行っていたことは確認できる。なにやら昨今の第三セクター方式のようでもあるし、代わり映えのしないこの国の社会教育事業の趣もうかがえるようである。

こうした施設の常として豪華図集が作成され、その意義の喧伝のために関係者に配布されるのはよくあることである。しかしこの展示主体が代わる毎に次のように少しずつ異なる図集が出版され、つい最近にも求めに応じて画集が出版されている。注意しておきたいのは最初の二書では壁画とされているのに、掲げられるべき建物から外されると絵画と呼ばれている点である。蔵屋も指摘しているように、日本では同じく絵画であっても固定できる展示場所を占有している間は壁画と呼ばれていたのである。画集の書誌事項と印刷技法を次に掲げておく。

結城素明編『東京府養正舘国史壁画集』国史絵画会、昭和十七年、図版

七十七葉、光村原色印刷所、着色写真網版（原色版）
結城素明編『東京都養正舘国史壁画集』同会、昭和二十九年、図版五十三葉、光村原色
国史絵画集刊行事務局編『伊勢神宮歴史絵画舘国史絵画集』同事務局、昭和四十年印刷所、着色写真網版（原色版）、図版七十八点、光村原色印刷所、オフセット印刷
小堀桂一郎監修・所功編『名画にみる国史の歩み』近代出版社、平成十二年、図版七十八点

各版で掲載図版数が異なっているが、総ての作品が今も当初の通り伊勢に伝存公開（展示面積の制約のため全点ではない）されている。最初の画集は当初計画されたのは七十七点のみで編集されたが、実際に国史絵画舘に掲げられた作品は七十八点だったのである。竣工後、壁面にあわせて松岡が「皇太子殿下御外遊（其の二）」を追加して制作し、計三点の壁画を完成させたのである。二番目の戦後すぐの画集は肇国神話や明治維新以降のほかのかなりの作品を省略している。講和独立後でも戦勝国の眼を気にかけたのかと思われる。この画集は昭和三十六年に戦後最初の式年に当たり開催された第五十九回式年遷宮記念博覧会に貸し出されるに際して作成されたと推測される。その後、伊勢市内宮前に建てられた歴史絵画舘で公開されたのがこの点数だったのかもしれない。同書の結城素明や元知事のまえがきを読むとこの時点では国史絵画会はまだ存続していたことになる。最後の画集では、総点数は七十八点で違いないが、農業舘に寄贈されていた勧農絵画二十五点のうちの五点が差し替えて収録されている。すなわち、棧大晃「班田収受」、堤利彦「清和天皇」、三輪晁勢「太閤検地」、戸島光雄「徳川吉宗」、五味清吉「木口小平」である。しかし、これらはサイズも由来も異なるのに、なぜこのときここに含められたのか画集にもその理由は説明されていない。

勧農絵画とは富民協会農業博物館（堺市）が昭和二十一年閉鎖されるに伴い、伊勢神宮農業舘に譲渡された六四八件の一部である。ちなみにこの農業舘は明治二十四年（一八九一）に神苑会が構想した徴古舘の一部をもって創設された博物館である。その会頭は松岡をイタリアに送ってくれた花房義質であった。

有栖川宮記念公園は現在も同じ名称で公開され、かつての広場には参謀本部内に建っていた有栖川宮熾仁像（大熊氏広作、明治三十六年）が昭和三十七年（一九六二）にオリンピックに伴う道路工事の余波を受けて、三宅坂から移築されている。これによって記念碑と正門は視界が遮られてしまい、広場の当初の設計意図は失われてしまった。養正舘の建物は総て戦火を免れたのだが、昭和二十年（一九四五）から東京都教育局が使用し、翌年四月に進駐軍に接収され二十八年まで中華民国国連代表部として使用された。公園としては、昭和二十二年（一九四七）には麻布盛岡町公園と名づけられていたが、昭和四十八年（一九七三）には有栖川宮記念公園として旧清風園を含む敷地が一体化され、五十年に港区に移管され今日に至っている。そして、昭和四十五年（一九七〇）に東京都立中央図書舘を建設するために旧清風園内の総ての建物が取り壊されたのである。フィールドワーカーを自認する小生は久しぶりに公園を訪れたのだが、公園旧正門や清風園の正門は今も殆ど元のまま残され往時を偲ぶことができた。国史絵画舘の建っていたあたりはゆるやかなマウンドとなり、その中央に舟越保武「笛ふき少年」が所在なげにぽつんと立っていた。その眼差しの先の一方、公園広場に歩を運んでみると、いまや紅毛碧眼の母子あるいは乳母子のバギーがひしめきあい異国の言葉が飛び交う喧騒に包まれて、有栖川宮像はすっかり様変わりした幼少年育成の有様を見下ろして佇んでいるのだった。まだ養生舘が建っていたボブ・ディランの嗄れ声を聞いた時からですらもう三十年余が過ぎているのだ。

一寸

第十二号　二〇〇二年十月

第十二号目次

新・旧刊案内12
太平洋戦争期の美術研究批判の批判　六　青木　茂　1
明治石版拾遺
前号補綴・穂菴擬布袋図・石版名刺の流行・石版画
手彩色の職業・発禁裸体画の明治二十二年　岩切信一郎　5
残されたひとやま《給油所》（その2）
―藤牧版画の後摺りについて8　大谷　芳久　10
小室直樹『あなたも息子に殺される』　金子　一夫　16
広瀬はいずこ　丹尾　安典　18
江戸の銅版絵入り本　銅・石版画遺聞10　森　登　21
時代は変わる―国史絵画舘をめぐって　森　仁史　26
■古本歩き（特別挿入）　神保町の巻■
田中恭吉版画再考　Ⅳ
あるいは、老年探偵団　山田　俊幸　29
執筆者別執筆一覧　第一号から第十一号　30

新・旧刊案内12
太平洋戦争期の美術研究批判の批判　六

青木　茂

拙稿は太平洋戦争中の美術図書を読みながら、当時の美術史研究の水準を測ろうと思ったのであるが、美術図書は必ずしも美術史書ではないことを忘れていた。しかし、川上澄生の戦時中の小さな出版物は本人が何を考えていようと藤田嗣治の大きな画面を全面的に否定するものだった。澄生の絵本は美術史学とは「われ関せず」でありながら、美術史の研究者に戦争と美術との関係について考えるのを強制する。というわけで私は昭和十八年一、二月の美術図書の月旦を試みながら、出版物に惹かされて美術史の歴史・美術そのものの移り行きを忘れていたようである。

その上、私はとんでもない失敗を重ねていた、この間、私の本箱の下の方に横積みになっていた

・鏑木清方『清方随筆選集　第三巻　絵具筥』昭和十八年一月十五日、双雅房、B6判、二〇八ページ

というのを発見したのである、ああやんぬるかな、十八年一月刊行なのである。私はあわてて東京文化財研究所の中村節子さんを尋ね、その手許の電気道具（？）のチカチカする画面（？）に際限もなく映し出される清方関係文献に怖れをなし、心情では「この情報は責任者名がないからウソくさい、何といったって俺はこんな文献に俺の手で触ったことがない、触りもしないものを信用できるもんか」と決めた。画集の図版でその絵を観たかのように思うのは、テレビの画面で稀少動物の交尾シーンを見るようなもので、ただの幻影・蜃楼の幻視である。

『清方随筆選集　第三巻』があるのなら、その一巻二巻だってある筈だ。